

問題 1

【出題の意図】

問題1は、岡本薫『世間さまが許さない！―「日本的モラリズム」対「自由と民主主義」』（ちくま新書、2009年）から出題した。世の中に溢れる「ルール」や「モラル」に関する出来事や論争について具体例を挙げながら、筆者の考えを示している箇所を抜粋した。事例がわかりやすく、筆者の意見が明確に示されている中、受験者がどのように文章を読み取り、筆者の意見に反応するか、をみている。

【採点の基準】

＜設問1＞ [文章の理解力、要約力]

文章読解問題である。文中から、筆者のいう「ルール」と「モラル」の意味を整理しながら、日本的モラリズムについての解説を求めた。文章は読みやすいものであるが、この設問に対する明確な解答箇所は存在しない。よって、文全体を理解しつつ、再度受験者がその文意を構成しなおすことが求められている。ポイントはいくつかあるが、主要な点は以下の通り。

【解答例】

ルールとは、社会的に人々の行動を規制するもので、作為義務と不作為義務がある。一方、モラルとはこれらの義務が課されていないものであり、各人の内心の自由によるものである。本来ルールを守ることが正しい行動であるにも関わらず、日本的モラリズムの文化では、内心の自由である個人のモラルの善悪によって、行動を評価しがちであるということ。 (162字)

＜設問2＞ [文章力、理解力、考察力]

- システムとモラルの関係について、文中の例の中から簡単な解釈・論点の整理を加えながら、自分の考えを論理的に述べることを求めた。設問1によって設問2を導けるようにしているので、文中事例の問題点をまず整理しているかどうか採点のポイントである。
- 自分の見解を述べる部分については、意見の是非は問わない。この文章に対して、論理的に意見を述べることができるか、を判断している。
- 単なる「かわいそう」「日本人にはなじまない」といった感情論、「自分はこのようなことをされた」という経験談に終始したもの、「さて、ところで」と突然用意してきた文章を出して本文とは全く関係ない論を展開するものについては、評価を下げることとした。

【答案の傾向】

- 設問1、2ともに、読んでいて意味がわかる文章かどうか、ということが採点基準になった。字体同様、自分のスタイルを貫くのではなく、相手に読ませることが重要である。
- 設問1に関しては、比較的解答しやすかったようである。しかし、完全にポイントをおさえている解答は少数であった。部分的に点数を取ることで、受験者間で大きく差がつかなかった。
- 設問2の筆者の意見について反対の姿勢をとるには、例えば以下のような意見が考えられる。「ル

ール或いはそれを遵守するためのシステムは、モラルを背景にして形成されるものである。人を殺してはいけない、というルールは、もともとはモラル（倫理観）から発生しているのではないか。よって、個々のモラルを他人に押し付けることと、文化に基づいた共通のモラル（世間さま）について区別のうえ、特に後者についてはルール形成過程の重要なステップとしてみるべきであると考ええる。」まさしく、この通りの論理構成で明確に反対意見を表明した受験生がいた。筆者の意見に反対の姿勢をとることは受験者にとって勇気のいることだと思うが、反対意見を述べた解答のほうはその勇気が必要な分、論理的な構成を意識した文章になっていた。

- 設問 1、2 を通して、受験者によって誤字は散見されたが、全体としてとりたてて多かった、という印象はない。
- 但し、「解答を採点者に読んでもらおう」という意識に乏しい解答用紙は多数見られた。「文字」が美しいかどうか、という問題ではなく、丁寧に書かない、薄い、小さい（マス目の3分の1にも満たない大きさの解答もあった）、など、とにかく自分の字体スタイルを貫く受験者が多い。文章を書く、ということは、文体の美しさだけではなく、それ以前に相手に「読ませる」文字を書くことが重要なはずである。見えない採点者を意識し、解答を「読ませる」ように努力している受験者は、総じて文章力や考察力も高かった。
- 論理的に自分の意見を述べることを求めたが、特に筆者の意見に「賛成」の受験者に多く見られた傾向が、問題文を書き写し「自分もそう思った」「気づかされた」、というパターンである。「意見」「見解」を求めたのであり、「感想」を求めたのではない。2～3割の受験生にこの傾向が見られた。
- 文章の中で用語として、「ちゃんと」「きちんと」～「しなければならない」、「大変なことになる」「困る」という言葉が多く見られた。しかし、何に対して上記のような言葉が使われているのか、具体性に乏しく、総じて評価は低かったように思う。
- 事例として、尖閣諸島のビデオ流出問題、モンスターペアレント、給食費未納、裁判員制度などが挙げられていた。

問題 2

【出題の意図】

問題 2 は、近年大きな社会問題となっている非正規雇用に関する出題である。1986 年に労働者派遣法が施行されて以来、非正社員数は徐々に増えてきたが、金融危機以後、99 年の派遣法改正や実質経済成長率の低下にともなって非正社員数はかつてないほど増加してきている。労働法制、経済情勢、実質経済成長率などと絡ませながら正社員と非正社員に関するデータを見比べることにより、非正社員の傾向や特徴は一体何であるのかを読み取らせ、それを踏まえた上で、経営者および非正社員のそれぞれの立場からその是非について見解を述べさせることにより、受験生の経済・社会に対する問題意識や洞察力を問いたい。

八代尚宏著『労働市場改革の経済学』（東洋経済新報社、2009 年）の図表および『平成 19 年版労働経済白書』の図表から出題した。

【採点基準】

<設問 1> [図表の読解力、理解力、要約力]

図表 1～3 からは、労働者派遣法の制度改正・経済情勢の年表および実質経済成長率の変化と絡ま

せながら、正社員数と非正社員数の増減、あるいは非正社員の構成の変化について経年的な変化を読み取り理解することが出来るかどうか、また図表4～6については、正社員と非正社員（あるいは男女）の違いによる年齢階級別勤続年数の違いや勤続年数別賃金カーブの違い、派遣労働者の意識から非正社員の就労の状況を読み取り理解することが出来るかどうかを問うている。図表から読み取れる情報量は極めて多いので、その中で一体何が本質的な情報かを読み取り、要約する力が要求されている。全体のバランスを考慮して、ストーリー性のある答案を評価した。ポイントはいくつかあるが、主要な点は以下の通りである。

【解答例】

1986年に労働者派遣法が施行されて以来、非正社員の数は徐々に増えてきたが、98年の金融危機や99年の派遣法改正によって非正社員の数はかつてないほど増加してきており、2002年と08年を比較すると309万人増えている。非正社員比率でみると、女性の雇用者総数の約半数は非正社員であるが、08年でみると男性の非正社員比率も2割近くに増えてきている。そのうち、15～24歳の若年層の比率が約4割と高いが、55～64歳の高齢者の比率も高まってきている。

非正社員は、年齢を重ねても勤続年数の伸びが正社員に比べて低く、年齢を重ねるに従って正社員との間に勤続年数の開きが生じる上、たとえ長期間勤続できたとしても正社員のような賃金上昇がなされず、賃金に格差が生じている。また、派遣労働者の意識としては、自分にあった契約期間や仕事を選べるのでよいとする一方、長期の保証がないことや雇用契約が更新されるかどうかで不安になっている。（393字）

<設問2> [文章力、考察力]

設問1を踏まえた上で、経営者および非正社員の両方の立場からバランスよく書けていることが望まれる。また、主張点が明確で内容に客観性があることも採点のポイントになる。経営者および非正社員から見て、各々非正社員を是とする立場、非とする立場のいずれもあり得るが、その主なポイントは以下の通りである。

経営者側からの是非：人件費を柔軟に扱うことができ、景気変動に合わせて必要なときに必要な分だけ確保することが出来る。また非正社員の単価が安い場合は、コストを削減できる可能性がある。その一方で、正社員に比べて労働時間、勤続年数がともに短いため職業能力形成が不十分となりがちであり、また会社に対する忠誠心も育たない可能性もあり、労働生産性が低くなる可能性がある。

非正社員側からの是非：雇用者側のリスクを抑えられるため、企業の雇用需要を喚起し、多くの雇用機会を得ることができる。自分にあった契約期間や仕事を選べるので良いとしている。その一方で、長期の保証がないことや雇用契約が更新されるかどうかで不安となっており、特に不況になると解雇されるリスクを負う。また正社員に比べて労働時間、勤続年数がともに短いため、職業能力形成が不十分となりがちであり、正社員ほど賃金が上昇しない。

【答案の傾向】

- 設問1の図表の読み取りでは、バランスの悪さが目立った。特に経年変化について全くふれていない答案や、図表6をほぼそのまま記載する答案が多かった。バランスをとるためには、各図表の特徴を絞って解答する必要があるため、バランスの良い答案ほど図表の読み取りにストーリー性を持つ傾向が見られた。

- 設問 2 の非正社員の是非を問う問題では、「非正社員を雇用している会社の経営者、非正社員の立場に留意しながら」とあるのに、政府、国の政策的介入に終始する答案、経営者の立場にふれていない答案が多かった。
- 非正社員のデメリットについてはそれなりによく書けていたが、「正社員に比べて労働時間、勤続年数がともに短いため、職業能力形成が不十分となりがちである」ことを指摘している答案は少なかった。
- 問 1 で解答すべき内容を問 2 で記述し、特に図表 6 に従う形で、非正規社員の現状と意識を述べるにとどまる解答も散見された。
- 非正社員の増加が、デフレ経済や若年層の非婚、少子化を生み出していると指摘する答案は多く、非正社員の立場を改善するよう政府や経営者が努力すべきとの意見が多く見られたが、ではどうすれば良いのかという具体的提案が乏しいように感じられた。
- 出題側の図表提示の意図に反して、問題をすりかえる形で予め用意していた解答を記述するだけの答案は以前に比べて激減した。良い傾向である。
- 毎年のことであるが、誤字が多数散見された。参考までに一例を挙げると、以下の通りである。
打解→打開、対偶→待遇、低迷→低迷、対称→対照、経気→景気、高景気→好景気、不恐→不況、育子→育児、労働→労働、優益→有益、増化→増加、事常→事情、頃→傾、不況化→不況下、正者員→正社員、正社会数→正社員数、雇うために営利である→雇うために有利である